

# 初期ルカーチの思想形成

—『歴史と階級意識』の今日的意義—

西角 純志

## I 序

二〇世紀後半になり、歴史の世界史的な「パラダイム転換」のなかで、現存する社会主義は全崩壊し、資本主義はその体制の均衡を堅持することができた。しかし、西欧近代資本主義社会は、

状態に没落していくのか<sup>(1)</sup>、アドルノとホルクハイマーのこうした問いは、『啟蒙の弁証法』（一九四七）を準備した。ルカーチの「ヨーロッパ的人間性」・「近代ヨーロッパ文明」そのものに対する問い合わせにおいても共通しているようと思われる。

私の研究課題は、このような認識に基づいて崩れ去った一つの思想、マルクス主義とは、如何なるものなのか、を追求することにある。確かに今世紀初頭の段階では、少なくともその理論的有效性はあった筈である。だとすれば、具体的に一体何がそうさせたのであるか、それとも思想の側に問題があったのであるか、そしてその原因を究明する必要があるのではないかと考へる。その場合手掛かりになるのが、「西欧マルクス主義の創始者」、ルカーチである。

初期ルカーチの思想を考察するにあたって確認しておきたいこ

とは、『歴史と階級意識』（一九二二）が、彼の生涯を通しての思想の中心に位置しているということである。ルカーチの思想は一般に『歴史と階級意識』を中心とする二〇年代の「初期の思想」と三〇年代にモスクワに亡命してからの「後期の思想」とにわけられることができる。今回初期ルカーチの思想形成において考察されるべき点の一つは、ハンガリーの裕福な家庭に育つた彼が、何故、マルクス主義に転じたのか、そしてそれは如何なる思想の影響があるのか、である。マルクス主義という概念は、広義にはマルクスの思想なり、唯物史観をさすものと理解されているが、ルカーチは、決してマルクスの弟子ではなかったのである。イヴァン・ブルデは、ルカーチを現実のマルクス主義の「身体」をつくりあげた「マルクスの対話者」であったと述べ、ルカーチの「マルクスへの道程」を「ルカーチ・マルクス主義」として特徴づけている。小論のもう一つのねらいは彼の初期の大著『歴史の階級意識』<sup>(5)</sup>にまで溯って思想的背景を概観し、今日的意義を考えることにある。

## II 「ハンガリー知識人運動」と「日曜サークル」

ルカーチ (György Lukács 1885-1971) の生まれ育ったハンガリーは、オーストリア・ハンガリーの二重帝国であった。銀行の頭取を父にもつ彼は若き日々をブダペスト大学で過ごす。そこで彼が出会ったものは「ハンガリー知識人運動」である。ルカーチのほうした知識人運動への参加はエンドレ・アディ (Endre,

Ady 1877-1919) の詩にはじまる。ルカーチは自伝で「わたしの生涯のもつとも決定的な体験のひとつになってきた」<sup>(6)</sup>と述べているが、ルカーチの生まれ育ったハンガリーとは、アディの詩があちこちを代表しているかの如くであった。<sup>(7)</sup>ルカーチは、文化活動にはいり国外に目を向ける立場をとった知識人向けの雑誌『ニュガド（西方）』 Nyugat（一九〇八年創刊）や、後に自由主義者と社会主義者の双方を含む団体「社会科学協会」の機関誌となった『フサディク・サーザム（二〇世紀）』 Huszádk Század（創刊一九〇〇年）に定期的に寄稿し、「ターリア劇場」の創立に協力して、演劇に深い興味をしめしていた。<sup>(8)</sup>また、ルカーチは、アタベスト大学時代に社会主義学生クラブに参加し、その指揮者エルヴィン・サボー (Ervin Szabó 1877-1918) から大きな影響をうけ、彼の「サンディカリズム」に對して共鳴していた。<sup>(9)</sup>「アタベスト革命的社会主义学生同盟」と呼ばれたこのクラブは、ルカーチも語るように「まじめに考えるに足りる唯一の社会主义運動」<sup>(10)</sup>であった。ところが、われわれがこのような運動に注目しなければならないのはいくつかの理由がある。それは、この運動が進歩的な知識人と中産階級を媒介とするハンガリーの民族主義運動であった点である。やがて、この運動はブルジョア急進的運動へと導いていくことになるが、ルカーチの思想形成の土壤になつた点で無視できない。

また、一九一五年の秋にルカーチが兵役のためハイデルベルクから帰国した時にはじまる「日曜サークル」の果たした役割につ

いても注目しておく必要がある。当時、よく似たサークルにカール・ボラーニーが創設した学生組織「ガリレイ・サークル」があり、ルカーチも出入りしていたと思われる<sup>(1)</sup>。ルカーチは、「ガリレイ・サークル」とは対照的な「日曜サークル」をつくった。カラーディによると主な参加者はルカーチの他、フォガラシ、バラージュ、ハウザー、マンハイムの他に、ボラーニー兄弟や、美術史家アンタルとトルナイ、芸術家たち、それに、サボー等といった今世紀を代表する多彩な知識エリートが集まっていた<sup>(2)</sup>。アルノルト・ハウザーは、「日曜サークル」について次のように回想している。「日曜談話会は一九一三年から一九一八年まで、毎週ペーラ・バラージュ邸で開かれ、われわれは午後三時から夜中の三時までそこにたむろしていた。一一二時間のうち一〇時間はルカーチがしゃべった。……グループの守護神は、あの初期のころには、キルケゴールとドストエフスキイであった」<sup>(3)</sup>。サークル内ではルカーチが常に中心的な役割を担い、哲学、美学、倫理的問題についての討論が行われ、世界と生の把握において倫理学が主要課題として議論されていた。

カラーディらは、当時のルカーチの倫理学の基本的な論題はキルケゴールとドストエフスキイにおける「魂の実存性」であったことを指摘している<sup>(4)</sup>。ルカーチは、「ドストエフスキイ論に向うての覚書」Notizen zum Dostojewski-Buchにおいて、カント的な責任倫理の意味で、抽象的な規範を孤立化した孤独な個人との関係として捉え、この孤立性を打ち破るものとして、苦しみをともなう連帯感のなかに孤立化した魂の溶解をみいだすドストエフスキイ的な寛容の倫理との区別を行っている<sup>(5)</sup>。ルカーチはこれらの倫理学を精神史の類型論として受け入れ、ヨーロッパとロシアのイデオロギーの対比として展開させ、新しい倫理学の思索を試みたことがわかる。「日曜サークル」のなかから、やがて「精神科学自由学院」が生まれてくるが、第一次大戦末期から革命期にかけてのハンガリーの知識人が求めた精神の行方は、彼らの自己形成の場として、はかり知れぬ意味をもつことになった。

「日曜サークル」は、ルカーチが共産党に入党するまで続いている<sup>(6)</sup>。ルカーチが共産主義に転じたのは大戦終結直後であるといわれている。中央権力の敗北に伴うハプスブルク体制の崩壊の結果、一九一八年、一月一六日、以前の野党指導者ミハイ・カーロイを首班として、ハンガリー共和国が成立した。そしてその翌日、ロシアで捕虜になっていたペーラ・ Kun (Béla Kun 1886-1939) が帰国し、二一日、「ハンガリー共産党」が結成された。そして一二月、ルカーチは「ハンガリー共産党」に入党した。しかし、ルカーチの共産主義への転向はあまりにも突然のことであつた。彼の内面に、どのような心境の変化があつたのであらうか。その手がかりになるのが入党直前の論文である。「倫理的問題としてのボルシェヴィズム」と題する小論には次のように述べている。

「倫理的問題性をめぐる問い合わせの総体は、民主主義というものが（社会主義者がまだ少数派であり、抑圧者階級のテロルに抗して闘っているような時代にとって）社会主義の戦術のひとつにすぎ

ないのか、それとも、すべての倫理的および世界観的結果が明らかになってしまうまでは揚棄することができないような、社会主義の本質的な一部であるのか、ということの如何にかかっている。後者の場合であれば、民主主義の原理と手を切ることは、責任意識と自覚とをいだいて「すべての社会主義者にとって、きわめて重大な倫理的問題である」<sup>(17)</sup>。

ここで彼の問題提起は「ひとはいかにして倫理に反して、しかもなお正しく行動できるか」という「倫理的な葛藤」の問題である。社会主義者に与することは倫理的にはルカーチを救つてくれるが、政治的には共鳴できないまま活動することを意味する。しかし、共産主義者に加わることは政治的には共鳴できるが、目的が手段を正当化し、眞の民主主義よりテロリズムの方を選択することを意味する。しかも共産主義か社会主義のどちらかを選択しなければならない。この選択を前にして彼は自らに問う。「あなたがわたしとわたしの行為とのあいだに、ひとつの中罪を置かれるとき、あなたをお恨みして、あなたから逃れようとするなら、そのわたしは、いつたい何ものでございましょうか」。このようないの彼の問いは、おそらく「日曜サークル」の議論のなかから生まれたものと思われるが、彼自身のマルクス主義への方向性に拍車をかけることになったと考えられる。

### III ドイツ留学時代におけるジンメルとヴェーバーとの交錯

さて、われわれは、ルカーチがマルクス主義へ至った思想形成

の土壤を「ハンガリー知識人運動」、「日曜サークル」を中心に見てきたが、次に考察されるべき点は、ヨーロッパ、ことにドイツ留学時代に如何なる思想的影響があつたかである。この点に関して『マルクスへの私の道』(一九三三)と題する「思想的自伝」とマリアンネ・ヴェーバーの有名な伝記『マックス・ヴェーバー』を手がかりに観ていただきたい。

「私が親しく学んだジンメルの影響によって、私は、自分がこの時期にマルクスから得たものを右の世界観〔ヴィンデルバント及びリッケルト、ディルタウの世界観〕に「間借りさせる」可能性さえ与えられていた。ジンメルの『貨幣の哲学』及びマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムに関する著作』は、私の「文芸、社会学」にとつて模範であつた。勿論、そこには、当然、深い且つ色褪せた姿でマルクスから得た諸要素がまだ含まれてはいたものの、しかし、それはそれと認め難いようなものであつた。私は、ジンメルを模範として、一方、経済学的基礎というものを甚だ抽象的に考えつつ、それから極力「社会学」を解放し、他方、「社会学的分析」は美学の本当の學問的研究の予備段階に過ぎないと考えていた……依然として、マルクスは力量優れた経済学者であり、「社会学者」であるとは考えていたが、当時の私の活動から見ると、暫くの間、経済学や「社会学」は貧弱な役割しか果たしていないなかつた」<sup>(21)</sup>〔内、傍点筆者〕。

ジンメルもヴェーバーも今世紀初頭を代表する社会哲学者である。当時はヴェーバーよりもジンメルの方が著名で双方とも新力

ント派に属している点で共通性がみられる。シンメルは当時ベルリン大学で教鞭をとり、ルカーチは一九〇九年から一九一〇年にかけて「親しく」学んでいた。シンメルは『貨幣の哲学』（一九〇〇）、『歴史哲学の諸問題』（一九〇五）といった社会学、哲学の著作をはじめ、『ショーベンハウэрとニーチェ』（一九〇七）など文化、芸術に渡って幅広い作品を残している。とりわけ『貨幣の哲学』においては、貨幣がそれ自体、質的「内容」を持たず、社会的交換関係という「形式」によって人間の認識に決定的な影響を及ぼすことを力説している。ルカーチは、『歴史と階級意識』において直接『貨幣の哲学』について言及し、「物象化」論を展開しているが、シンメルのこの著作を通してマルクスを学んでいたことは間違いない。他方、ルカーチがハイデルベルクで、ヴェーバーに会うのは一九一三年である。マリアンネ・ヴェーバーは、ヴェーバーが書いた手紙を次のように引いている。

「私が与えられた印象は非常に強いものであり、私は問題設定は決定的に正しいものであると信じます。享受者の立場から、次いで創造者の立場から美学をやろうと試みたあげく、今までよいよ本物の作品の番がやって来たのは有難いことです。貴兄の形式概念が登場したらどういうことになるかと私は大いに好奇心を感じています。形象化された生はたしかに経験的なものの域を超えた価値的なものであるが、それだけではなく、『牢獄』の深い一番奥の片隅にあらわれて来るエローティック、シヨーナーのもまた形象化されているものなのです。それはすべての形象化された生」と

ともに罪あるものの運命を担い、「形象を受けつけぬ」 form-fremd 神の王国に属する一切のものとの対照の質においては審美的態度に似てさえいます。このものの実際上の位置が決定されねばなりませんが、貴兄においてはそれがどこにあるということがあります」（傍点一部筆者）。この手紙で問題になっているのはルカーチの美学についての著作である。ルカーチは、既に『魂と形式』（一九一一）など数多くのエッセイを発表していくがハイデルベルクでは全く新しい「体系的美学」の構想を試みたことが伺われる。「生」と「形式」との矛盾、あるいは対立と捉えるルカーチの「美学体系」は、今までなくシンメルの「生の哲学」からの影響である。

ルカーチは、ヴェーバーから科学方法論なり社会理論など多くのものを吸収している。『歴史と階級意識』においてヴェーバーの『政治論集』から「近代官僚制」の問題を取り出し「物象化」論に組み入れている。また、ヴェーバーの方も一九一九年一月一六日にミニュンヘンで行った講演の最後の方では直接ルカーチの名前を出して『職業としての学問』について語っている。<sup>(25)</sup>さらに一月末にも同様に『職業としての政治』についての講演を行っているが、この講演でヴェーバーは、政治と倫理の問題について触れている。ヴェーバーは、政治における目的と手段とのパラドックスを自覚し、かつそれに堪えうるような近代的主体を「責任倫理」と「心情倫理」の統一のなかに見いだそうとする。そして何よりも「責任倫理」を貫徹することを主張する。ヴェーバーの

この見解からすれば、「ひとはいかにして倫理に反して、しかもなお正しく行動できるか」という革命を志すルカーチの「倫理的な葛藤」の問題は、ヴェーバーにとっては理解され難い。ルカーチの「倫理的な葛藤」の問題をヴェーバーの「心情倫理」と重ね合わせた石塚省二の指摘は鋭い。<sup>(36)</sup>しかし、石塚がここにおいてあまり触れていない点は、この講演がルカーチの『戦術と倫理』（一九一九）の論文と時期を同じくしている点である。ヴェーバーは、新カント派の基本的概念 *Sein* と *Sollen* を超えられない現実としてだしてくるが、ルカーチはあらたに *Wissen* という概念を提示し、階級意識の復興において西欧近代の「生」の危機的状況を乗り越えようとした。<sup>(27)</sup>

ルカーチのおかれた現実は彼の『小説の理論』からも読み取ることができる。一九一四年から一五年の冬にかけて執筆された『小説の理論』は現代をフィヒテにならって「完成された罪業の時代」<sup>(28)</sup>として特徴づけ「近代文化の悲劇」を顧みる。彼は近代の世界を「生」の総体性が失われた世界と捉え、総体性の回復をヘーゲル哲学の可能性にたくした。彼は古代ギリシャの世界を自己完結的な完成された世界とするが、閉鎖的な自己完結的な世界が過ぎ去った時、近代人の眼の前に現れた世界は自我と外界とが分離した、いわば「物象化された世界」である。「わたしを西欧文明から救ってくれるのは誰なのか」という彼の問いは、まさしく西欧近代の「生」に対する危惧にはかならない。ルカーチは『小説の理論』の序文においてディルタイの『体験と文学』に魅せられ

たことをはつきり述べているが、ディルタイの著作なり、彼のヘーゲルに関する数多くの著作は、ルカーチのマルクス主義に決定的な影響を与えた。<sup>(30)</sup>一九世紀後半からの世界史のダイナミズムはヘーゲル哲学からの離反、そして新カント主義の台頭、さらにヘーゲル主義の復興といった「転換期」にあったが、ジンメル、ディルタイといった「生の哲学」の復興、「ヘーゲル・ルネッサンス」をマルクス主義の領域で行つた著作が『歴史と階級意識』である。

ハンガリーにおける社会民主党と共産党との対立は激化し、一九一九年三月二二日にハンガリー・ソヴィエト共和国が成立したが、ルーマニア軍の武力干涉のために、わずか一二三日間にして崩壊した。九月末、ルカーチはヴィーンに亡命し、ヴィーンを結集点とした東南ヨーロッパの革命運動、ドイツの運動にかかわっていた。一九二〇年代初頭ルカーチは、コミニテルンの東南ヨーロッパ各支部の機關紙『共産主義』の編集に携わる傍ら『歴史と階級意識』を著わした。

#### IV 「ルカーチ・マルクス主義」の特徴

さて、それでは『歴史と階級意識』は如何なる特徴をもつか、マルクス以降のマルクス主義に如何なる思想的影響を与えたのだろうか。

一九一九年六月から二二年末までに書かれた『歴史と階級意識』は、八つの論文から成り立っている。そのうち、「組織問題の方

「法論」（一九二一）と、「物象化とプロレタリアートの意識」（一九二二）は新たに付け加えられたことになった。この著作は副題にもあるように「マルクス主義の弁証法的研究」を全体の主要なテーマにしている。とりわけ、第一論文の「正統的マルクス主義とはなにか」（一九一九）では、「弁証法的マルクス主義のなかに正しい研究方法が見出された」ということを……學問的に確信する（31）ことを主張し、ベルンシュタイン（Eduard Bernstein 1850-1932）に代表される修正主義やトドラー（Max Adler 1873-1952）らの俗流マルクス主義に対する批判を行っている。ルカーチは、第二インターのマルクス主義を経験的事実にもとづき自然法則を追求する新カント派的マルクス主義だと見做し、「總体性への志向」が欠落したものとして批判する。ルカーチによれば、「マルクス主義をブルジョア的な科学から決定的に区別する点は、歴史の説明において経済的な動因の支配を認めるところにではなく、總体性という観点をもつところにある」という。「總体性のカテゴリー、すなわち、部分に対する全体の全面的、決定的な支配」ということ、これこそマルクスがヘーゲルから受け継ぎ、根本的に作りかえてまったく新しい学問の基礎とした方法の本質にはかならない（33）といっている。ところで、「總体性のカテゴリー」は、シンメル、ディルタイらの「生の哲学」から学びえたものでルカーチの初期・後期を問わず追求したひとつの中であるとみることができる。さて、その「總体性のカテゴリー」は、『歴史と階級意識』では、資本主義的な生産が必然的に生み出す「物

神的な対象性形態」を主張するものとして描かれている。それはマルクス主義内部における認識論として、「現実認識」・「歴史認識」・「対象認識」が三位一体として、「定立する主体にも定立される対象にも總体性を要求」するところである。

また、「總体性のカテゴリー」は、より根源的には「媒介のカテゴリー」によって規定されるということである。「媒介のカテゴリー」は、マルクス主義美学における特殊的な概念で、「直接的所与」を客觀的な現実に転化させるはたらきをする。例えば、

ある「物」Ding が「物件」Sache であるためには「ある特定の關係」におかれはじめてそういうもので直接的には変わらない。したがって「あらゆる社会の生産諸關係が一つの總体を構成する」諸媒体を見つけ出すことによってそれが規定され、より「具体的なもの」になっていく。ここから「具体的總体性」へと繋がっていくのである。そして、ルカーチは、近代社会において特殊的な立場をとる「プロレタリアートの立場」に主客同一の弁証法的可能性をみたのであった。

ルカーチのこの著書がマルクス以降のマルクス主義に与えた影響は大きい。彼は近代資本主義社会を「物象化」Verdinglichung という概念で、人間と社会の分裂した世界として捉え、人間が客觀的な事物を作り出した主体でありながら、この事物が独自の法則によって運動し、分裂した構造をとり、人間をもこの世界に巻きこみ分裂させる現象を描きだした。

ルカーチの「物象化」論の特徴は、主体と客体の対象性形態を

総体として考察していることである。人間の「知覚」は、いまや客体の対象性形態に従属させられ、「幻影的な対象性」をもち、「物自体」Ding an sich は把握されず、社会的交換を取り結ぶやいなや、人格と人格との社会的関係も「物」Ding と「物」Ding の関係として「物」Ding の属性 Eigenschaft として反映するのである。<sup>(37)</sup> ここから主客の転倒といった物象化の基本的な事実が確認できる。そして人間の労働時間は、物象化が進行するなかで、形式的な同等性は失われて、なにか疎遠な「物」Ding という物理的な「空間」へと凝固され、われわれはここに西欧近代の「生」の危機を顧みることができる。<sup>(38)</sup>

ルカーチの「物象化」論を考察するうえで注目すべき点は、ヴェーバーの「合理化」論とマルクスの労働力の「商品化」論とを重ね合わせたところにある。ヴェーバーは、前近代資本主義社会の対する近代資本主義社会の特徴を「計算可能性」を目的にした「形式合理性」にあるとみる。「形式合理性」は、実質的な特定の価値において成り立つ「実質合理性」に対し言われるもので、ヴェーバーは土台構造から上部構造まで世界のあらゆるところに渡る合理化を既に予言していた。テーラシステムのように労働過程が近代的に「心理学的」に分解されると共に、「魂」までくい込むといった労働者の姿は既に、ヴェーバーのみたところかもしれない。他方、マルクスは、『資本論』において「商品の物神性」の問題から資本主義社会の問題の分析を行っている。マルクスの功績のなかで注目すべき点は「労働力の商品化」という事態である。

「労働力の商品化」とは、労働者がみずから生産手段をもたず、自らの労働力を独立した「物」として自由に市場で売却することを意味する。「労働力の商品化」による資本主義社会の搾取の構造を描いたマルクスの分析は鋭い。ヴェーバーは、前近代から近代社会への移行へを「呪術からの解放」として合理化を積極的に肯定する。しかしながら、マルクスは近代社会の克服の担い手を「階級」に求めた。そして、両者のこの進歩的思想を直接問題にしたのがルカーチである。ルカーチによればブルジョアジーは「疎外を自分たちの力」だと考え、プロレタリアートのように、非人間的なものとは感じない。これに対してプロレタリアートは労働力を全人格に対し客体化するなかで、商品としての自己の客体性と主体性との分裂が生ずるからこれは同時に意識されることになる。これから「認識の主体であると同時に客体」という「社会の弁証法」の命題が成立する。労働者は、自己の労働力を売つてこれを客体化する時、この分裂を意識せざるをえない。言い換えれば、労働者は、自分自身を商品として意識するときのみ、自分の社会的存在を意識することができる。また、プロレタリアートはブルジョアジーに対して歴史的には、客体として姿をあらわすが、歴史は、媒介された対象性形態の変化の歴史であるから社会によって規定され歴史を真に媒介する主体になりうる可能性をもつ。<sup>(41)</sup> ここから「歴史の弁証法」の命題が成立する。そして同時にこの認識は、その認識の客体の対象的な構造に変化をもたらすというのである。<sup>(42)</sup>

ところで、ルカーチの「物象化」論の特徴のもう一つの側面がある。それはマルクスにおいてあまり展開されなかつた「意識の物象化」を正面から取り上げたことにある。リュシアン・ゴールドマンや石塚省二はこの点について興味深い考察を行つてゐる。ゴールドマンはラスクを媒介にした思想的水脈から「物象化」という概念が新カント派内で議論の対象になったことを指摘した。<sup>(43)</sup>

彼によればマルチン・ハイデッガーは『存在と時間』（一九二七）で、「意識の物象化」という概念をつかつてゐるが、この「意識の物象化」はルカーチの「物象化された意識」を表わしているのだといふ。<sup>(44)</sup> ルカーチ自身、「労働過程の合理化」のなかで、労働者は、自分の労働力を自分に「所属していいる」商品として、「労働の物象化過程」に身を置くことは避けられず、「労働者の意識の物象化」もまた進行し、「人間的諸関係をはつきりと示す自然に生じてきた諸関係の代わりに、合理的に物象化された諸関係を置く」という方向にはたらく」と述べ、「物象化された意識構造」をもたらしたことなどを指摘している。石塚もまた、ゴールドマンの功績を裏づけ、エドムント・フッサーールとルカーチとの関係を明らかにした。<sup>(45)</sup> その点を考えるとゴールドマンらのマルクス主義と現象学を結びつけた功績は、從来のルカーチ解釈に新たな兆をもたらしたということになろう。ルカーチは、経済の物象化現象からはじめて、法や政治、科学、哲学といったイデオロギーの物象化分析まですすみ、マルクスの未解決であった上部構造の物象化の問題に答え、近代資本主義社会の土台・上部構造の全体を明

らかにしている。「ブルジョア思想の一律背反」において、認識原理・実践原理・芸術の原理の三つの領域に渡つて「意識の物象化」の抽出をおこなつてゐるのがわれわれの興味をひく。このようないくつかの未解決であつた上部構造の「意識の物象化」を解明した点に特徴がある。

ルカーチは、このよくな「物象化」現象を克服する担い手を階級意識においていた。ところで、われわれは『歴史と階級意識』の第三論文「階級意識」（一九二〇）が、第四論文「物象化とプロレタリアートの意識」（一九二二）の二年前に執筆されていることに注意を払わなければならない。ルカーチの「階級意識」論は「物象化」論と同一視する見解があるが、ルカーチの「物象化」論は「階級意識」論抜きにして語ることができないし、その逆も同じである。<sup>(46)</sup> われわれは先に、ルカーチが共産党入党した後の『戦術と倫理』（一九一九）とヴェーバーの『職業としての政治』（一九一九）との関係についてみてきたが、ルカーチの「階級意識」論の特徴は、「知る」Wissenという認識行為を階級意識の「意識化」のプロセスと考えた点である。ブルジョアジーもプロレタリアートも物象化された対象性に身を置くことは避けられない。同様に「物象化された意識」をもつてゐる。しかしながら、マルクス主義の考え方では社会の階級構成は生産過程の占める位置によつて規定されるものであるから客観的な類型は異ならざるをえない。ルカーチは「生産過程のなかの一一定の類的状態に帰属させられ、それに合理的に適合する反応が階級意識」と定義づけ、<sup>(47)</sup>

ブルジョアジーとプロレタリアートの階級意識の分析を行つてゐる。「総体としての階級の歴史的に意味をもつ行為」も結局のところ階級意識から規定されるから、階級闘争という問題から遠ざかるにつれてそれは「無意識」化している。したがつて、現実を「知る」ことによつて「意識化」して「眞実の意識」を形成する必要がある。そのためには、諸階級は「直接の利害」・「個々の契機」といった「目的設定」を如何にして意識のなかで媒介して「究極目的」に結びつけるかと、いうことが重要になつてくる。ここから彼の「階級意識の弁証法」の抽出ができる。ルカーチはこのように「知る」Wissen という認識行為を階級意識の「意識化」のプロジェクトとして捉えたのであつた。

さて、ルカーチの「階級意識」論のもう一つの特徴がある。それは「階級意識の客観的理論は、階級意識の客観的可能性的理論」であると、いうことである。ルカーチは、階級意識の「意識化」により、意識の分裂を止揚することを主張したが、彼は意識の取り扱いについて「二重の弁証法的規定」をし「客観的可能性的カテゴリー」の適応によって階級意識の「客観的可能」性を究明しようとした。彼のいう「客観的可能性的カテゴリー」は、基本的にはヴェーバーのそれを継承するが、「歴史的総体性の契機」といふ点でヴェーバーのそれとは方法概念を異にしているように思われる。ルカーチは、「科学的マルクス主義の本質」を「歴史の現実的な原動力が、それについての人間の（心理学的な）意識から独立しているのを認識することにある」と規定しているが、彼の

いう階級意識の「客観的可能」性は「意識化する」ということが、人間の意志によつて合成されていながら、人間の恣意からは独立しており、人間の精神では発見できないような目的にむかつて、歴史過程があつみださざるをえない、決定的な歩みを意味するような場合<sup>(55)</sup>において、「階級の歴史的状態の意味が意識され<sup>(56)</sup>」ことをいう。ルカーチは、近代資本主義社会になつてはじめて階級意識が成立し、「歴史的総体性の契機」として階級意識を「意識化」することによって「客観的可能」性が生まれてくると考えた。そもそもそれは、階級意識を「意識化」することであった。他方、ヴェーバーは、前近代からの近代への移行を「宗教社会学」と結びつけて歴史変革のエーティスを形成せしめる力を追求した。それは広い意味で「世界の呪術からの解放」Entzauberung der Welt であった。ルカーチもヴェーバーも、「心情倫理」的な問題を課題にした点で「使命的予言者としての性格」を帶びているように思われる。ルカーチのマルクス主義は、このように、ヴェーバーとマルクスの進歩的思想なり歴史観を重ね合わせているところに一貫とした特徴がみられる。

## V 結語

以上われわれは、初期のルカーチの思想形成を「歴史と階級意識」を中心考察してきたがルカーチの思想形成期は、まさに、「戦争」と「革命」といった「内面的な危機をはらんだ過渡期」であった。「倫理が実践の方向へと、そして行動の方向へと、そしてそ

れと同時に政治の方向へ……究極的にはマルクス主義の哲学へ」と導いたのである。ハンガリーの詩人アディにはじまり、サンデイカリスト・サボー、そしてジンメル、ヴェーバー、ラスク、デイルタイといった今世紀を代表する思想家たちとの交流は結果的にルカーチをマルクスに近づけることになった。一九二〇年代を前後にした新カント派の中から台頭していく動向と、広くロマン主義の系譜から「生の哲学」の流れを汲んだ思想家たちの「大河の合流」地点に、ルカーチのこの著作があつたといえよう。

『歴史と階級意識』はその後、ベルリンで出版されるやいなや、たちまち論争の的になり、コミニテルンからカール・コルシュの『マルクス主義の哲学』(一九二三)と並んで批判された。<sup>(59)</sup>しかし、ルカーチの『歴史と階級意識』がマルクス以降のマルクス主義に与えた影響はあまりにも大きかった。かつてマーチン・シェイは『マルクス主義と総体性』(一九八四)において、「西欧マルクス主義」内での「総体性」の源泉をルカーチからハーベーマスに求め、石塚は『ポスト現代思想の解説』(一九九一)において「現代思想の源流としてのルカーチ」像を描いた。<sup>(60)</sup>その一つに一九二三年のフランクフルト「社会研究所」の創設にはじまる「フランクフルト学派」に対する影響がある。ユダヤを中心としたこの研究グループは、マルクス主義を理論的に研究することを目的にしていた。ところが一九二三年、ナチスが権力掌握をするやいなや、ナチスの攻撃の対象になり、服毒自殺したベンヤミン以外は、合衆国への亡命を余儀なくさせられた。彼らはニューヨー

クにあるコロンビア大学の一角を借りて各自独自の研究をしていったが、彼らの共通した問題関心は、近代文明の急速な発展は何故、ナチュラムという野蛮状態を生み出さるをえなかつたかであった。アドルノとホルクハイマーの共著『啓蒙の弁証法』、マルクーゼの『エロスと文明』、フロムの『自由からの逃走』といった著作はそれを象徴しているかの如くである。彼らのこうした「ヨーロッパ的人間性」・「近代ヨーロッパ文明」に対する問いは、『啓蒙の自己崩壊』・「文明の野蛮化」という点でルカーチと重なる。二〇世紀の思想界の「混迷状況」が続くなかで、ルカーチの思想をマルクスのそれと比較し、マルクス主義内部でどのように展開されているかを辿ることによって「ルカーチ・マルクス主義」は途にいいくことになる。

## 註

- (1) マックス・ホルクハイマー、テオドール・W・アドルノ『啓蒙の弁証法』徳永恂訳 岩波書店 一九九〇年「訳者あとがき」四一一頁以下。

- (2) ルカーチは『小説の理論』の「序文」(一九六一)において、「わたしを西欧文明から救ってくれるのは誰なのか。(わたしには当時のドイツが最終的に勝利するなどという見通しは、悪夢としか感じられなかつたのである)」などと語っている。

*Formen der großen Epos* (Luchterhand Verlag, 1982), S. 5.

(『ルカーチ著作集』1巻 大久保健治、藤本淳雄、高木

研一訳白水社 一九八六年 111頁)。訳 Lukács, TdR  
と略記。

(3) ルカーチは「マルクス主義思想の受容  
法の冒険」(一九五五)においてルカーチの『歴史と階級  
意識』に対して一章全部を裂き「西欧マルクス主義」とい  
う概念を普遍化せた。しかし、後にルカーチは「共産  
主義誌」編集部に手紙をよせて、次のように抗議している。

「マルロー・ポンティ氏は、《真的》弁証法の積極的な特徴  
だけとして、レーニンおよびレーニン以後の唯物弁証法の  
現実的な発展にたいする、いわゆる《西歐的》共産主義の  
表明として、すでに過去のものとなつたわたしの本の弱点  
を利用しようとしている」。ガロディ他『反マルクス主義批  
判』根岸良一他訳 書肆ペトリア一九五七年 1107~11  
○九頁。

(4) また、ルカーチは彼の『思想的自己』でマルクス主義の  
研究期を三区分している。

第1期: 「前マルクス主義的」段階一九一九年までギム  
ナジウムの終わりへ『小説の理論』(一九一四)  
一九一五) シンベルの影響が大きい。

第2期: 「messiaische」段階一九一九年~一九二二年  
『小説の理論』を契機にヘーゲル研究を通してマ  
ルクスの本格的な研究が始まった。そして一九〇  
「歴史哲学」のうちに総合して読み直された。

五一の著作の研究  
そこでも、この区分けはルカーチのマルクス主義思想の受容  
と不可分である。

Georg Lukács, "Mein Weg zu Marx (1933)" Georg  
Lukács zum siebzigsten Geburtstag (Berlin, Aufbau-  
Verlag, 1955), S. 225-231.

(『現代思想』別巻 歴史・人間・思想 和波書店 一九  
五九年所収 1149~1154頁)。訳 Lukács, 70. G-  
eburtstag と略記。

また、原文と邦訳は次のものを使用したが引用文は一部邦  
訳と同一でない箇所がある。

Georg Lukács, *Geschichte und Klassenbewußtsein*  
*Studien über marxistische Dialektik* (Luchterhand  
Literaturverlag, 1988).

(伊藤成彦訳『歴史と階級意識』「序文」、浦野春樹他『ル  
カーチ研究』啓隆閣 一九七一年所収)。

(城塚登・古田光訳『歴史と階級意識』白水社イマー選書  
一九九一年)。訳 Lukács, GuK と略記。

(5) イヴァン・ペルバ「ルカーチの諸相」石塚省一訳『富山  
国際大学紀要』三巻 一九九三年  
石塚省一「社会哲学の原像」世界書院 一九九〇年七頁、  
K○頁参照。

(6) István Eörsi, Georg Lukács Record of a Life  
translated by Rodney Livingstone (Verso Edition,  
1983), p. 39.  
(池田赳士訳『出走した思想』白水社 一九八四年  
110頁)。

第3期: 「移行期」一九二三年~

(7) A' カダルカイは、ルカーチはアディの説のなかに、ニーチェの「近代文化の悲劇」を読み取つていたとみていい。<sup>120</sup>

Arpad Kadarkay, "The Nietzschean Moment"

Georg Lukács: *Life, Thought, and Politics* (Cambridge, Mass., Blackwell, 1991), p. 63ff.

(8) ルカーチの弟子であるジッタ・メーヤーロン<sup>121</sup>は、「<sup>122</sup>ガリーの革新は文化運動にあり、ルカーチの出発点をもぐタペストリの『ターリア劇場』運動にあらわす。一八四八年革命の指導者たるほどんど詩人であった。

平井俊彦「ルカーチの思想研究の動向」『黙想』一九七一年七月一一三頁以下。

(9) 平井俊彦は「サボーの重視するのは、労働者の意識の積極的役割であり、これは一面でルカーチの階級意識と結びつくはずである」と述べ、リヒトハイムを跡付けている。また、サボーはルカーチと同様にユダヤ人の中流家庭で育ち、若き日をヴィーン大学に学びマルクス、ニーチェ、ペルードンラドロフ、クロポトキンを好んで読み、ヴィーン大学でのロシア人亡命者の影響を受け、マルクス主義者となり、「タペストリに帰つてから『社会主義学生同盟』を組織した。平井俊彦「ルカーチの思想研究の動向」前掲一一三一～一一三二頁。

G・コヒュベイム『ルカーチ』古賀信夫訳 新潮社 一九七〇年 四八頁。

(10) István Eörsi, trans., op. cit., p. 41. (新訳 前掲 七一頁)。

(11) 田羅サークルは、ヴァーバーが自分が押擰つた「む

ニーベー・クライツ」や「ジンメン・クライツ」などと活動形態がよく似ている。ルカーチのサークル活動は、彼が「ニーベーは出發した前の一九〇八年頃から始めたのだ。

石塚省一『タペストリ現代思想の解説』白顧社 一九九一年六七頁。

(12) Éva Karádi und Erzsébet Verér, *Georg Lukács, Karl Mannheim und der Sonnagskreis* (Frankfurt am Main, Sender Verlag, 1985), S.8-9.

(13) David Kettler, *Marxismus und Kultur: Mannheim und Lukács in den ungarischen Revolutionen 1918-1919* (Luchterhand Verlag, 1967), S. 60. (鶴永桐説「若きルカーチとハガニー革命」『ルカーチ研究』由水社 一九六九年所収 1111K頁)。

(14) Éva Karádi und Erzsébet Verér, a.O. S.16-17.

(15) Ebenda, S.17-18., S.193-205. ルカーチのNotizen zum geplanten Dostojewski-Buch

(16) (『<sup>123</sup>画かれだよスムハベキヨー語は伝ないの實體』)は小説の理論においても読み取ることができると思われる。せだ、M・グルックは、田羅サークルは、最終的には、自由主義者とマルクス主義者に分裂し、政治的集団と化したらしいを指摘している。

Mary Gluck, "War and the Fragmentation of the

Sunday Circle," *Georg Lukács and his Generation, 1900-1918* (Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1985), pp.198-203.

丸山瑛一は、革命前は「田羅サークル」の議論は「おじいちゃんの話題」やおじいさんの話題だったが、今

ン・メルヒューバーの方哲論的眼鏡を通して理解された」とを指摘している。それば、當時のマルクス主義が第一回

ンターの修正主義・日和見主義的であることに基づいていふるので、後には、これが基になってハンガリー社会民主  
党に対する不信を生じ、実証主義にも反対してしまふことになつてゐた。

丸山桂一「ハタクベトロロサーケルトモの思想的諸問題」  
『社会思想研究』五卷 一九八一年 一四〇頁。

(17) Georg Lukács, "Der Bolshevismus als moralisches Problem", *Taktik und Ethik* (Luchterhand Verlag, 1975), S.28.

(梶田赳士訳『ルカーチ初期著作集』目録 1111 頁 1  
九七六好 112111頁)。

(18) István Försi, trans., op. cit., p.53.  
(新訳 丸好)。

(19) G.H.R.Parkinson, "Lukács'Life and Times" Georg Lukács (London, Routledge & Kegan Paul, 1977), p. 5.

(青木順三・針谷寛訳『ルカーチ』 未来社 一九八一年  
| 四頁)。

(20) István Försi, trans., loc. cit.  
ルカーチの「社会主義者としての『黙の闘』」が想  
起されるに及んである。

(21) Lukács, 70. Geburtstag, a.a.O., S.226-227. (新訳 111111～111111頁)。

(22) 三内内清「ソシカル・ルネッサンスの立場」『リーフ  
ルネッサンス』 未来社 一九九一年 1111～111111  
| 四頁)。

真。

(23) 『歴史と階級意識』では、ルカーチは、一度シンメルの

「資本の概念」に觸及している。

Lukács, GuK, a.a.O., S.187. (邦訳 111111頁),  
S.278. (新訳 111111頁)

(24) マリア・ネ・カーハーバー『マックス・カーハーバー』大久  
保和郎訳 みすず書房 一九八九年 三五二頁。  
シンメルやカーハーバー夫婦との親交は往復書簡がひまわ  
か 180。

Éva Karádi und Éva Fekete, Georg Lukács  
Briefwechsel, 1902-1917, vgl. (Stuttgart, J.B.  
Metzlersch Verlagsbuchhandlung, 1982).

(25) ルカーチ・カーハーバー『職業としての批評』 西高邦雄  
訳 岩波文庫 一九八九年 六九頁。

(26) 石塚省二『モット現代思想の解説』前掲 七七頁。  
(27) あた、住谷一彦は「カーハーバーと現代」の観点からこの  
批評闘争に觸及してゐる。

住谷一彦『ルカーチ・カーハーバー』 批評の思想的視座  
NHKトマスク 一九七一年 111111頁以下。

NHKトマスク 一九七一年 111111頁以下。

(28) Lukács, TdR, a.a.O., S.12. (邦訳 111111  
| 四頁)。

(29) 註の参考。

(30) Lukács, TdR, a.a.O., S.7. (邦訳 111111頁)  
Lukács, GuK, a.a.O., S.59. (邦訳 111111頁)。

(32) Ebenda, S.94 (邦訳 111111頁)。  
(33) ebd., S.94. (邦訳 111111頁)。

(34) ebd., S.97. (邦訳 111111頁)。  
(35) ebd., S.269 (邦訳 111111頁)。

- (36) ebd., S.71. (邦訳|17頁)。
- K・マルクス『哲學の貧困』高木佑一郎訳 大月書店 一九八九年 |141頁)。
- (37) Lukacs, GuK, a.a.O., S.170—171. (邦訳 | 141頁)’ S.174—175. (邦訳 | 146頁)。
- (38) ebd., S.179. (邦訳 | 171頁)’ S.180. (邦訳 | 171頁)。
- (39) ebd., S.294. (邦訳|101頁)。
- (40) ebd., S.87. (邦訳|17頁)。
- (41) ebd., S.60. (邦訳|16頁)’ S.90. (邦訳|16～17頁)’ S.291. (邦訳|19～20頁)。
- (42) ebd., S.296. (邦訳|101頁)。
- (43) Lucien Goldmann, *Lukács and Heidegger*. translated by William Q. Boelhower (London, Henley and Boston, Routledge & Kegan Paul, 1977), p.29.
- (44) Lukács, GuK, a.a.O., S.126. (邦訳 | 101頁)。
- (45) ebd., S.126—127. (邦訳 | 101頁)。
- (46) ebd., S.146. (邦訳 | 101頁)。
- (47) ebd., S.167. (邦訳 | 101頁)。
- (48) ebd., S.126. (邦訳 | 101頁)。
- (49) ebd., S.120. (邦訳 | 101頁)。
- (50) ebd., S.60. (邦訳 | 101頁)。
- (51) ebd., S.159. (邦訳 | 141頁)。
- (52) ebd., S.159. (邦訳 | 141頁)。
- (53) ebd., S.126. (邦訳 | 101頁)。
- (54) ebd., S.120. (邦訳 | 101頁)。
- (55) ebd., S.60. (邦訳 | 101頁)。
- (56) ebd., S.159. (邦訳 | 141頁)。
- (57) ebd., S.14. (邦訳「序文」前掲 | 101頁)。
- (58) ebd., S.8. (邦訳「序文」前掲 | 101頁)。
- (59) 石塚省二『社会哲学の原像』前掲 八五～九四頁。
- (60) 石塚省二『社会哲学の原像』前掲 一五五～一五九頁)。
- (61) Martin Jay, *Marxism & Totality: The Adventures of a Concept from Lukács to Habermas* (Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1984).

を背景にして、なんらか注目した。その意味で、初期マルクスの「疎外」論とは区別されてくる。

(48) 「物象化」論では「物象化された意識」は、「階級意識」論では「虚偽意識」として把握され、また、「階級意識」論では「意識の虚偽性」は「物象化」論では「物象化された意識構造」として把握されてある。私見によれば、これでは、やはり「物象化」と「疎外」を区別しなかつたハーゲル哲學がそのままルカーチが受容したとみる」といふである。

Verlagsbuchhandlung, 1982).

István Eörsi, *Georg Lukács Record of a Life*.

translated by Rodney Livingstone (Verso Edition, 1983).

(鶴田赳士訳『ゲル・トトリティ』 日本社 一九六四年)  
研究文献

Georg Lichtenheim, *Lukács* (London, Wm. Collins Sons & Co Ltd., 1970).

(中野信夫訳『ゲル・トトリティ』新潮社 一九七一年)

István Mészáros, *Lukács' Concept of Dialectic* (London, The Merlin Press 1972).

(平井俊哉訳『ゲル・トトリティ』『ゲル・トトリティ』書房 一九七一年既刊)

Perry Anderson, *Considerations on Western Marxism* (London, 1976).

(中野実義『西欧マルク主義』新潮社 一九七六年)

G.H.R. Parkinson, *Georg Lukács* (London, Routledge & Kegan Paul, 1977).

(鶴木豊・翁谷寛訳『ゲル・トトリティ』未来社 一九八一年)

Lucien Goldmann, *Lukács and Heidegger*, translated by William Q. Boelhower (London, Henley and Boston, Routledge & Kegan Paul, 1977).

(三保晃四郎『ゲル・トトリティ・ヘイデッガー』岩波大百科叢書 一九八一年)

Arato Andrew and Breines Paul, *The Young Lukács and the Origins of Western Marxism* (London, Pluto Press, 1979).

Éva Karádi und Éva Fekete, *Georg Lukács Briefwechsel, 1902-1917* (Stuttgart, J.B. Metzlersch

(鶴田赳士訳『ゲル・トトリティ』全集社 一九九一年)

Martin Jay, *Marxism & Totality: The Adventures of a Concept from Lukács to Habermas* (Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1984).

(荒川幾男他訳『ゲル・トトリティ全集』国文社 一九九一年)

Éva Karádi und Erzsébet Vérér, *Georg Lukács, Karl Mannheim und der Sonntagskreis* (Frankfurt am Main, Siedler Verlag, 1985).

Mary Gluck, *Georg Lukács and his Generation 1900-1918* (Cambridge, Mass, Harvard University Press, 1985).

Schoji Ishitsuka, *The Place of Lukács' Geschichte und Klassenbewußtsein* (Berlin, 1923) in *Contemporary Thought* (Kraków, 1986).

Tom Rockmore, *Lukács Today Essays in Marxist Philosophy* (D.Reidel Publishing Company, 1988).

(鶴木豊・翁谷寛訳『ゲル・トトリティ』河出書房新社 未来社 一九八九年)

Árpád Kadárky, *Georg Lukács: Life, Thought, and Politics* (Cambridge, Mass, Blackwell, 1991). L.Illés,

Akadémiai Kiadó, 1992).